

「さが防災シンポジウム2011」が開催されました

去る8月23日、佐賀県立美術館ホールにおいて「さが防災シンポジウム2011」が開催されました。当日は、約300人が参加し、宮城県「河北新報社」武田真一氏の基調講演とパネルディスカッションの2部構成で、『本当の「備え」とは～東日本大震災から学ぶ～』をテーマとして防災についての考え方や取組みについて学びました。

第1部 基調講演

武田 真一 氏(宮城県・河北新報社報道部長)
【大震災で「備え」は生きたか】

東日本大震災の中で、地震と津波の被害としては最大規模であった宮城県。

その宮城県で報道活動を行なっている「河北新報社」では、過去に起こった「明治・三陸沖地震」等の教訓を語り継ぎ、地震への備えを繰り返し呼びかける啓発活動を長年続けて来られている。

そんな中発生した過去最大規模の大震災を報道としてどう伝えたか。

そして、震災から5ヶ月が経過した今までの間に、人的被害の大きかった所と少なくて済んだ所にはどんな違いがあったのかを検証し続けている。

講演の中で武田氏は、

『東北の方々は過去に何度も大きな地震や津波を経験してきており、地域に伝えられている防災の「備え」があった。

しかしながら、それが「生きて」いた所とそうでない所で被災の規模は大きく違っていた事が分かった。

東北には「津波でんでんこ」という言葉がある。

「でんでんこ」とは「てんでんばらばら」という意味で、津波が来たら、取るものとりあえず、バラバラでいいからとにかく高台に逃げろという事で、過去の経験から語り継がれている大切な言葉である。

これからの事を予見していくのも大事だが、まずは先人の知恵に学ぶ事が肝要だと思っている。』と述べられ、想定外・予測不可能と言われた大震災の中で、助かるための知恵は有効であった事を強調されていた。

同紙では、被害の規模を分けたのはどんな行動だったのか、どのような取組みが有効だったのか等を検証する事で、どんな減災・防災の対策が必要なのか、私達はその時にどのような行動を取るべきなのかを伝え、それを新たな教訓として生かして欲しいと考えられている。

講演の締めくくりとして、武田氏は、

『我々も長年地震や津波に対する「備え」の大切さを紙面で説いてきたが、それでもこれだけの被害となった。災害啓発の難しさを感じているし、通り一遍のやり方では、上手い出来ない事を前提として考えるべきと思っている。』

と述べられた。

今回の災害をいかに生かすかを、私達は十分に考えなければならない。



・会場の模様



・講演する武田氏



・大震災後の新聞記事(1)



・大震災後の新聞記事(2)

第2部 パネルディスカッション

- ◎パネリスト 山崎 忠文 氏（佐賀県総合防災統括監）
岸本 剛 氏（佐賀県建設業協会会長）
長友 信裕 氏（九州テレコム振興センター・コーディネーター）
武田 真一 氏（河北新報社報道部長）
- ◎コーディネーター 富吉賢太郎 氏（佐賀新聞社編集局長）
【本当の「備え」とは～東日本大震災から学ぶ～】

基調講演に引き続き、パネルディスカッションが行なわれた。

冒頭、コーディネーターの富吉編集局長から、『3.11以前、3.11以後と呼ばれるように、あの日を境に様々なもの・考え方が変化した。私たちは今後どのような「備え」をし、そのように過ごせば良いか今日、ここにご来場の全ての方を含めて考えていきたい。』

と、今日のディスカッションの趣旨を説明された。

続いて、出席者から現状と今後の取組等について、発言をして頂いた。

県の山崎統括監からは、県の災害想定及び防災対策の現状と今後の方針・課題等について話しがあつた。

岸本会長からは、県協会の防災への取組として、災害協定や防災訓練への参加、減災・防災ハンドブックの作成と進呈、親子防災教室の実施などを紹介。また、今後の防災への考え方として、災害が起こるときは常に想定外の状況になるのだから、我々は「謙虚」になる必要があるのでは、との提起があつた。

長友氏からは、宮崎県での防疫対策、噴火対策の実例が紹介され、九州を一つとして考える防災対策を考える事が佐賀県にとっても力のある防災対策になるのではとの提案があつた。

武田氏からは、協会に対してマスコミはどうしても悪いイメージで捉えがちな所があるが、このような進んだ啓発を行なっているとは知らなかった。素直に敬意を表するとの発言があり、災害の時にはまず自分の身を守る「自助」、そして他人や他の地域を守り助ける「共助」、そして、公的な機関の「公助」と進んでいくが、一人で出来る事・県や市町村で出来る事にはどうしても限界があるので、地域の繋がりなどを緊密にし、「共助」を広げていく事が大事だと思う。その為には、地域のリーダーの育成と広く浅い啓発ではなく、狭く深く、しっかり浸透する啓発に切り替えていく必要があると考えるとの発言があつた。

最後に、会場から質疑を募ったところ、佐賀市の男性から有明海の津波の想定高さについて、質問があり、山崎統括監より回答がなされた。

今回のシンポジウムの詳しい内容については、9月1日の防災の日に併せた佐賀新聞の紙面特集に掲載されますので、そちらもご覧下さい。



・パネルディスカッションの様相(1)



・パネルディスカッションの様相(2)



・山崎統括監と発言する岸本会長



・長友氏と武田編集部長